

# 多からなる一、他からなる自己 アメリカ文学と自分を探求する場所として

2007年から開講されたアメリカ文学の研究会。

現在3年生10名、4年生14名が在籍し、卒業論文執筆のために様々なテーマに取り組んでいる。

おおくしひさよ  
大串尚代  
文学部准教授

「アメリカでの暮らしは素晴らしいわ」「闘うことができればな」「ここは自由だし誇りも持てる」「自分の仲間と一緒にいればの話さ」——アメリカ・ミュージカル史上に名を残す『ウェスト・サイド物語』には、プエルトリコからの移民アニタとベルナルドが、「アメリカ」とはどんな国かをめぐって歌とダンスで戦うシーンがある。わたしがアメリカについて考えるとき、つねに思い出すのがこの場面だ。人々は自由と平等を求めてアメリカを目指す。だが自由を享受するために乗り越えるべき差別や困難もまた、存在する。それはアメリカが建国から抱える根本的な矛盾であり、その矛盾があるがゆえに、アメリカは興味の尽きない国だと思う。

「わたしが担当する米文学研究会では、学生たちがそれぞれの観点から、アメリカの多様性を考える方法を模索している。学生には研究テーマは強制しないが、かならず「自分が2年間考え続けられるくらい好きなテーマ」を探してもらう。人種・階級・性差の多様性を知り、文化の多元性を考える作業は、歴史・社会・政治的背景の幅広い知識が必要であるため、わたしが学生から教えられることも多い。指導する立場・される立場を越えて、お互いに切磋琢磨する場だと捉えている。

基本的には文学を扱うゼミであるが、学生たちには文学史的な知識だけではなく、「じっくりと考えるべき自分の言葉を模索すること」を学んでほしいと思っている。「なにを考えるべきか」「どう考えるべきか」「どんな意味があるのか」——こうした問いは、最終的にはそれを問う自分とは何者かへと繋がっていくはずだ。それは決してナイーヴな内面探求ではなく、自分と他者との関係性を模索する作業にもなる。こうした時間と場を提供することにこそ、研究会の意義があると思いつながら、学生とともに学び続けている。

## ゼミについて語るときに我々の語ること

ふくだまさゆき  
福田雅之 文学部4年

「純粋のリアリストとか純粋の芸術家などというのは、めったにいないものではない。われわれは、雑種の文学にとっぷり漬かっている雑種の存在なのである」と言ったのはアメリカの詩人ウォレス・ステイヴンズですが、同様にアメリカ文学・文化の多彩な方面に関心を寄せる学生が会するのが大串研究会です。

各々の研究テーマは文学作品にとどまらず、映画・漫画・スピーチなど多岐にわたり、週に1度の研究会では、某熱血テニス選手でさえたじろぐほどの熱い議論が繰り広げられています。

そんな我々を束ねるのが、文学部英米文学専攻の新たな女王として着々とその足場を固めている大串尚代先生で、先生の懇切丁寧なご指導を仰ぎながら、学生は各自の研究を追究し、雑多かつ豊饒な文学の世界に身を浸らせる妙味を日々享受しています。



# わかりませんと言ってはならない。理論を自分の頭で考える

ミクロ経済学とゲーム理論を学ぶ、各学年6～10名程度の小さいゼミです。自分だけでなく他者の利害を考えて結論を出す、というゲーム理論は人生でも大切な教訓になると思います。

## 真剣勝負

きたばたく お  
**北畑郁雄** 経済学部4年

私たちグレーヴァ研究会では、ゲーム理論、ミクロ経済学の英語文献をもとにプレゼンテーション主体でゼミを進行します。ゼミでは普段は自由闊達な雰囲気ですが、発表で不明瞭な箇所があれば、先生からの鋭い質問が飛んでくるので準備は怠れません。毎年夏休みにはゼミ合宿があり、今年度は河口湖へ。そこで4年生は卒論中間発表、3年生はディベートを行います。4年生は、当初とは見違える素晴らしい論文を書く者から、趣味に走る者まで多彩。3年生でディベートに負けた班は、その後のテニスで雑用係になるため、真剣勝負です。このような明るい雰囲気の中、グレーヴァ先生の厳しくも優しいご指導のもと人生で初めての本当の学問に日々励んでいます。



## グレーヴァ<sup>たかこ</sup>香子

経済学部教授

私の研究はゲーム理論の根幹的な問題が多いので、そのものを学部生といっしょにやることはできません。その代わり、いわゆる「教科書」に書いてある理論であつても完成しているわけではなく、学生でもちよつと深く考えれば突っ込み所はあることを教えています。通常の講義ではまったく受け身で理解するしかないのに対し、ゼミでは自分から「これはなぜですか」「他の場合はありますか」などとテキストにすら疑問を呈することが許されています。

また、当ゼミでは「わかりませんと言ってはならない」というルールがあります。受験勉強の影響で、「ちよつと考えてわからないところは飛ばす」ことを無意識のうちにしてしまう人は多いです。しかし、社会に出たらそのような考え方はやっていけません。人生も学問も細かいことの積み重ねでできていますから、一つ一つを確実に理解してこそ先に進んでいけ

るのです。「わからない」と思考を止めてしまうのでなく、まずは自分なりの理解をし、それを周囲の協力により正しいものにする過程を繰り返します。

4年生になったら、他人が書いた文献の論理を追うだけでなく、自分なりの疑問とその問題の構造を考えさせます。それが卒論につながります。問題はどんなものでもよく、これまでの卒論も、駅前と郊外のパチンコ屋は客寄せ戦略が異なるとか、競馬はギャンブルなのかエンターテイメントなのかなど、本人が興味のある問題について自分なりの論理で原因と結果を考えているものがよかったです。

卒業生の進路は、(卒論とは関わりなく)金融機関、メーカー、商社、IT産業、公務員、公認会計士など様々です。教員は論理を徹底指導したつもりなのに、卒業生にいつも感謝されるのは、威圧面接にも動じない精神力とプレゼン能力の向上です。

# 科学的な真実の解明により、安全・安心な社会の構築を

法医学教室では、犯罪の抑制、紛争の解決や事故防止に貢献するために、より客観性、説得性の高い診断をめざしている。

ふじた まさき  
藤田眞幸  
医学部教授

幼いとき、隣に法医学の先生が住んでおられたので、夕食後、遊びに行つて法医学の「講義」をよく聴いたものです。今から思えば変な話ですが、そういった経験が、私の人生を大きく変えたのかもしれない。卒業してから11年間は、病理診断科の医師として、癌の研究をしていましたが、今は法医学の教授をしています。

法医学では、捜査の手掛かりや裁判のための証拠をみつけだし、事件の解決や犯罪の抑制にとりくんでいます。また、鑑定は、法的紛争の解決や社会保障・保険の正しい適用にも用いられます。そして、事故原因の究明は、みんなの願いである事故の抑止や再発防止策の検討において、最も重要なステップでもあります。

このように、法医学の仕事は、「科学的な真実」を解明して、個々の事件を解決するだけでなく、社会全体にも働きかけ、安全・安心な社会の構築に貢献することです。

鑑定の結果によつては、事件や事故の当事者は刑務所に行つたり、多額の損害賠償を払わされたり、逆に遺族は払つてもらえなかったりします。また、事故防止はたいへん重要なことですが、いざシSTEMの改善をせまられると、多額の資金が必要になってくる場合があります。このように、ひとつの鑑定は、被害者だけでなく、利害の対立する多くの人々の生活に深く関係してきます。したがって、正しいことはもとより、誰にでも納得してもらうことができるように、確かでありやすいものではなくてはなりません。そのためには、より客観性、説得性の高い科学的な診断法の開発が必要となります。

現在、私の研究室では、その一環として、胃内容物の分子生物学的決定法などの客観的診断法の開発の研究を進めてきています。毎年、すばらしい学生さんがきてくれますが、若い学生さんとともに歩むことによつて、21世紀の法医学を展開できればと思っています。

## 法医学教室レポ

いしずか  
石塚あずさ 医学部4年

4年次の「自主学習期間」に法医学教室でお世話になりました。当教室では葉緑体DNAを用いた司法解剖における胃内容物の同定法の開発が進められていますが、私は新たに香辛料に着目した食事内容の推定法の研究をさせていただきました。最初は右も左もわからない私でしたが、藤田先生も技術員の方もたいへん丁寧に指導・サポートしてくださり、毎回教室に通うのがとても楽しみでした。法医学では、他の医学分野とはかなり異なる視点・観点での考え方が必要になります。医療ミスや犯罪捜査における司法解剖において、また裁判において、法医学の観点からは一体どんなことが重要になってくるのか、藤田先生は機会があれば、いつも法医学の面白さが実感できるお話をしてくださいませ。



# 慢性期・終末期病患者的患者教育・情報リテラシーとスピリチュアルケア

患者教育、患者のための情報リテラシー、スピリチュアルケアのわが国での普及を目指しての研究と運動をしています。  
私以外にプロジェクトの4年生が10人の構成です。

## 心の痛みから逃げないために

ほりのうちえみこ  
**堀之内英美子** 看護医療学部4年

「なんで自分はこんな病気になっちゃったんだろう。自分の人生はなんだったんだろう」。当プロジェクトの研究テーマ、スピリチュアルペインの一例です。このような心の痛みを患者さんに訴えられたら、あなたならどのように対応しますか？難しいです。しかし医療従事者である以上、逃げてはいけない課題だと思っています。プロジェクトはスピリチュアルペインとそのケアがどのようなものか、本を読んだり、患者さんの自助会やスピリチュアルケアワーカーの集まりに参加したりして学ぶところから始まります。そしてそれぞれが興味をもった分野の研究に進みます。日本でスピリチュアルケアの担い手になるのは？ケアを広めるためには？日本人に適したケアの方法は？課題は山積み。この分野が少しでも日本で広まるよう加藤プロジェクト学生10名、先生と共に奮闘中です！



かとうしんぞう  
**加藤真三**  
看護医療学部教授

5年前に医学部より看護医療学部へ異動しました。それまで、大病院で消化器内科の臨床に従事し、肝臓病、特にアルコール性肝障害が研究テーマでしたが、看護医療学部では慢性病態学と終末期病態学の担当となりました。本学は看護と医療ケアを教育・研究するために作られた新しい学部です。今までの専門分化した臓器別の医学でなく、医療を慢性期、終末期という観点からみなおすことにしました。慢性病での患者教育と医療情報リテラシーを、そして慢性期・終末期でのスピリチュアルケアを研究テーマにしました。

学会発表できるような研究を叱咤激励し計3件の学会発表をしました。一人の学生は自分の活動をエッセイとしてまとめ、看護教育の雑誌で入選しました。また、患者教育の資料を準備し、臨床の場で実際にプレゼンテーションした学生もいます。

第4学年のプロジェクト学生を募集したところ、1年目に入ってきた学生のやる気と馬力と能力に驚かされました。「これ読んできて」と手渡した英語の論文を、翌週には全文翻訳してきたのです。次は春にはその学生は1年間の研究成果をまとめて学会で発表することができました。その後の学生にも、

学生には自分自身で研究テーマを探すことの大切さを強調しています。手取り足取りの与えられる教育を期待するのではなく、自分で興味のあることを見つけ、資料や情報を集め、考え、工夫しながら研究計画を立て、それを論文にまとめたり、発表したりする過程を学ぶと同時に、勉学すること、研究することの楽しさを知ってほしいと思います。そして、卒業後にもここで学んだことをずっと自分のテーマとして考え続けてもらいたいと思います。これも優秀な学生の集まる慶應義塾だからこそ許される教育だろうと考え、私は慶應義塾大学の教員としての幸せを感じています。

ができました。その後の学生にも、

を感じています。

## ブラックボックスから玉手箱へ

衛生化学講座。卒論生は薬科学科4年生3名、薬学科5年生8名が在籍。来年度は薬学科6年生までぞろい、大学院生（現在5名が在籍）と合わせて大所帯になるが、研究室のスペースは変わらないのが目下、悩みの種。

たむらひろおみ  
田村悦臣  
薬学部教授

衛生化学講座では薬物代謝の組織特異性に焦点を当てて研究を進めています。最近、iPS細胞などのように、細胞の様々な組織への分化誘導に関する研究が世間を賑わせていますが、私の研究室では、出来上がった組織がどのような性質を持っているのかを分子生物学的手法で明らかにしようとしています。各組織を構成する細胞は、例えるなら、「ブラックボックス」です。細胞の中でなにが起きているかは、なかなか外からは見えませんが、押すか引くかたたくか、なにか刺激を与えると、返事をしてくれます。その返事から、なにを読み取るか、研究者の聞き手としての能力が試されます。

研究室では、様々な食品成分と細胞とのクロストーク（対話）に耳を傾けています。「食」は、その人の生活習慣と密接な関係にあり、一人ひとりの体の特徴（体質）を形作っている大きな要素と言っているでしょう。そのような体にとつ

て大切な「食」と細胞の代謝の関係を調べたいというのが、最近の私の研究の興味の中心です。

毎年「食」に興味を持った学生が、研究室の門をたたいてくれます。実際の研究は、毎日同じことの繰り返しであることも多い上に、予想通りのデータが出ないことも多いのですが、虚心坦懐に、じっと耳を傾けていれば、いつかは細胞の語る言葉が聞こえてくるものです。その時、「ブラックボックス」が「玉手箱」に変わります。その驚き、喜びが研究の醍醐味ですが、それを少しでも学生に味わってもらいたいと願っています。

卒業生の多くが、薬剤師として社会に飛び立ち、医療の現場で、様々な人々の声に耳を傾けることになると思います。そうした時に、研究を通して培った細胞の言葉や聞く力が活かされるのではなにかと期待しながら、日々教育・研究を行っています。

### 食との関わりを考える

こいぶちふゆこ 鯉渕芙由子 薬学部4年

当研究室では、食品成分が薬物代謝酵素に与える影響について、ヒト由来の細胞を用いて解析しています。私は赤ワインに含まれる抗酸化成分のレスベラトロールの影響について研究を行っていますが、コーヒー、ビタミン類、乳酸菌など、人によってテーマは様々です。食品と薬の相互作用に興味を持っていたことや、普段口にする食品がテーマだということもあり、楽しみながら実験を行っています。

細胞相手の実験なので、自分の思い通りに進まないことや、失敗することも多いですが、先生方や先輩たちに色々教えてもらいながら日々実験に励んでいます。これからどんどん知識を吸収して成長していきたいと思っています。

